ガラスが融け落ちる焼夷弾の雨の下で…

岡崎　幸子さん

昭和４（1929）年、品川区生まれ。
昭和11（1936）年、小学３年生の時、上高井戸（現・高井戸東二丁目）に転居。
昭和16（1941）年、東京市杉並高等家政女学校（現・都立荻窪高校）に入学。
在学中の昭和19（1944）年４月から女子学徒動員の先発隊として、三鷹市牟礼の日本無線に１年間通う。
昭和20（1945）年５月25日、区内最大の空襲を経験。

■ 15歳で女子学徒動員

昭和16（1941）年、私は12歳で荻窪の杉並高等家政女学校に入学した。ちょうどその頃、敵性語である英語の使用が禁じられるようになり、私たちの学校でも英語の授業が廃止されてしまった。そして昭和19（1944）年４月10日には女子学徒動員（参照▶P20）の先発隊としてクラスメイトとともに、当時、三鷹市牟礼にあった日本無線株式会社の工場に通うことになった。

すでに工場には、都内各地から多数の一般男性が徴用されて来ていた。当時15歳の私たちも、その中に混じって真空管の組立作業などに従事していた。作業中、本業は魚屋だという男性が、ガラスを溶かすガスバーナーの大きな音にまぎれて、「あー、うちに帰りたいなー」とため息混じりにつぶやいていた声が今でも忘れられない。工場では空襲警報（参照▶P20）が鳴ると、一番先に女学生を避難させてくれた。中島飛行機が爆撃された日も、工場の防空壕の中で、いり豆をかじりながら、約５キロメートル先の激しい爆撃を遠くから眺めていたのを覚えている。

■ 東京大空襲の日の悲しい出来事

昭和20（1945）年３月10日、東京大空襲の直後、いつものように工場に出勤すると、男性たちが、夜勤明けで上野や浅草の自宅に帰る人たちを囲んで「昨夜の空の色は尋常でなかったからお前の家は焼けてるよ、きっと」などと、口々にからかっていた。ところが、その夕方、実際に空襲（参照▶P18）で浅草の家を焼かれた男性が、ひとり悄然（しょうぜん）と工場へ戻ってきた。厳しい現実を目の当たりにして、みな声も出せずその男性を迎え入れた。

この日は、高井戸の私の家にも、空襲被害にあった下町住まいの遠い親戚の男性が、火傷した娘を文京区の順天堂病院に残し、３歳の息子の死骸を抱いて泣きながらやって来た。奥さんと他の子どもたちは、空襲で別れたままになったと言う。私は、男性が「まだ空襲にやられていない杉並の人たちが、井の頭線の中で自分たち親子を汚いものを見るような目で見ていた」と語るのを、やるせない思いで聞いていた。亡くなった３歳の子の遺体を入れるお棺が無く、やむを得ず子どもの入る大きさの樽を見つけてきてお葬式を出した。

■ 両隣が爆撃を受け炎上

昭和41年ころの高井戸駅

昭和20（1945）年の春、「専門学校生は動員されないらしい」という噂で多数が受験し、私も親に無理を言って港区の東京都立女子専門学校を受験、入学した。そして三田への電車通学にもやっと慣れてきた５月25日、高井戸は大空襲に見舞われたのだった。

当時の高井戸は、今のように住宅が密集していなくて、わが家の小さな家屋は四方を広い土地に囲まれていた。家の前には麦畑、裏手に大きな地図工場、右隣にはSさん宅の広い敷地、そして左隣に義兄宅があった。ちょうどその頃、私の姉は子どもを連れて福島県へ疎開中で、広い家に義兄が一人で住んでいた。空襲の起きた日は、義兄の勤めていた中島飛行機の同僚数人が義兄宅に泊りに来ており、私たち家族も手伝いを兼ねて宿泊する予定で、布団を運び入れているところだった。そして、「これで泊まる準備が整った」と思った矢先、突然、空襲が始まった。

空襲警報と同時に、爆音とともに雨のように降り注ぐ焼夷弾（参照▶P20）が光って見えた。焼夷弾が途中で爆発して、爆弾の中から無数の焼夷弾が落ちてきた。泊り客の若い男性が、防空頭巾にモンペ姿の小柄な私を突き飛ばして逃げ出した。瞬く間に自宅前の麦畑の緑の葉が燃え、近隣の家を取り囲むヒノキ製の垣根が、バチバチ音を立ててよく燃え広がるのが見えた。そして先ほど布団を運んだ義兄宅の四方から、物凄い大音

高井戸駅にほど近い高井戸小学校は杉並区でもっとも古い小学校の一つ

響と火炎が同時に吹き出した。「家が燃えてしまう」と思った私は、とっさに火を消そうと裏の手押し井戸へ水を汲みに近寄ったが、その瞬間、台所の窓ガラスが融けてぬるぬる流れ落ちるのが、炎の明かりで良く見えた。相当の高温だったはずである。井戸水を「ちゃ…」とかけてみたが、正に「焼石に水」だった。炎に照らされて、先ほど私を突き飛ばして逃げた男性が、電灯用の直径10センチメートルくらいの鉄柱の陰に必死で隠れようとしている姿が見えた。いざという時は、人を当てにしてはいけないという大事な経験になった。

後になって義兄から、「建物の真上に焼夷弾が落ちたのだ」と聞かされた。義兄は家が炎上する直前、忘れ物を取りに玄関から靴を脱いで家に入った瞬間、爆風で家の外へ遠く吹き飛ばされたため、靴が燃えただけで九死に一生を得た。

■ 永福町駅が焼失

家の前の麦畑も両隣も焼けたが、わが家だけは延焼を免れた。約500メートル先に住んでいた同学年のKくんが、自宅の屋根の上で消火作業中、焼夷弾をお腹に受けて長時間苦しんで亡くなったと、後になって聞いた。

この空襲で、井の頭線の大きな車庫があった永福町駅が焼失し、大量の車両が無くなってしまった。そのため、翌日から電車に乗るのが大変な難行苦行になり、窓の隙間から車両に乗り込んで通学する毎日が続いた。永福町住まいの友人もこの時、焼け出されている。「永福町駅から漏れた光が標的となって、この地域が空襲を受けた」という噂話は、相当長い間、流布していたが、この地域がなぜ空襲を受けたのか、私には今も分からないままである。

投下された焼夷弾の残骸
向方南遺跡C地点(方南1丁目52番)出土
（杉並区教育委員会蔵）

天沼で体験した３月４日の空襲

高橋　貞子さん

昭和４（1929）年新宿区生まれ、２歳の時に荻窪に移る。終戦時、四年制に短縮された女学校を卒業。
戦時中は、３年生から学徒動員が始まり、武蔵境駅近くの中島飛行機の分工場で働く。
３月の空襲被害を受け、新潟県長岡市に疎開するが、８月に長岡大空襲に遭う。
終戦後は９月中旬に荻窪に戻り、女学校に復学。

■ 昭和20（1945）年３月４日午前７時30分頃

私宅のありました、杉並区天沼三丁目（現・本天沼二丁目）の上空を、B29（参照▶P20）の小編隊（６機くらい）が、度々通過していました。しかし爆弾等の投下はなく、この辺は安全と思われておりました。

ところが、この朝は違い、私の知る限りですが、１トン爆弾が５個落とされたのです。私宅の属していた、隣組（参照▶P18）木造家屋10軒のうち５軒は全壊となり、あとの５軒も半壊に近い状況となりました。この日６名の方が、命を落とされました。当時大事件にもかかわらずまったく新聞ラジオ報道はありませんでした。

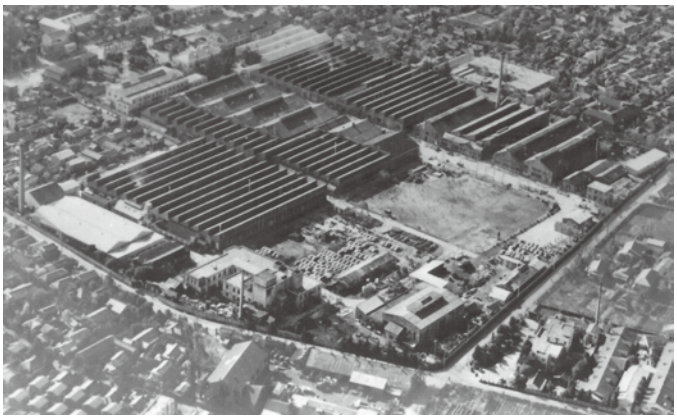
亡くなられた方は、私と同年の友人の父上で40代半ばでした。もう一人は同じ隣組に住んでいた70歳近くの伯母の姑で、病気のため静養中でした。また、北50メートル位離れたところに、杉並第五国民学校（現・天沼小学校）の女性教諭のご自宅があり、ここは直撃弾をうけて、ご一家４人が即死されたと伺いました。高松先生とおっしゃり、ご主人とお二人のお嬢様です。

■ ５個の爆弾の落下箇所

私の記憶ですが、落下箇所は以下の５つです。ただ、後に聞いた話ですが、同日の空襲（参照▶P20）で、隣に爆弾が落ちたという方に会いました。清水町の方だったと思います。あと２、３発は落ちていたかもしれません。この日の惨劇を知っている方にお会いしたいものです。井草での空襲被害も当時は知りませんでした。それほど報道はされておりませんでした。

（１）現・本天沼２-30-11の前の道路東側の側溝のコンクリートに当たったらしく、爆風と共にたくさんの破片が飛び散ったと思われます。これにより前述の隣組のお二人が、出血多量のため担架で衛生病院に運ばれましたが、この夜にお亡くなりになりました。

（２）現・本天沼2-31-11の辺りに、当時運動場と称する子どもたちの遊び場があり、ここにプールの半分ほどの、大きな防火貯水池が造られておりました。この真ん中辺に落ちたのか、昼過ぎまで水が渦巻き、次第に水が地中に吸い込まれました。この爆弾による被害はあまりなかったと思われます。



写真上：中島飛行機工場の作業服姿
写真下：終戦後の中島飛行機跡地上空　（写真提供：田中次郎さん）

（３）稲荷神社から北に100メートル位のところに、小さい森と祠（ほこら）があり、そこには一本杉と呼ばれていた大木がありました。杉並区のどこからでも見えるほどの高さでした。この真上に落ちたのです。地上50センチメートルを残し、全部失われました。たくさんのカラスが巣を失ったのでしょう。

（４）高松先生宅の直撃弾（前述）

（５）私宅から50メートルくらい北の早稲田通り手前の畑に

落ちて、直径30メートルくらいの、すり鉢状の大きな穴が開いているのを見ました。

■ 我が家の状況の記

この日は日曜日で、父の会社も弟の中学校も休日で、２人とも家におりました。高女３年の私は、学徒動員（参照▶P20）で、前年の11月から武蔵境駅近くにある中島飛行機製作所の分工場で、旋盤工として働いており、日曜も出勤でした。

７時10分ごろ家を出たところで、警戒警報のサイレンが鳴り、すぐ戻りました。とても寒い朝でしたから、弟とふたりで炬燵（こたつ）に入ってラジオを聞いておりました。まもなくB29の爆音が近づき、空襲警報（参照▶P20）が鳴る間もなく、大音響とともに家が揺れ、ガラスの割れる音、障子戸がばらばらになって飛ぶ音に、私と弟は炬燵布団にもぐって難を避けました。幸い父は庭先に掘った防空壕に入り、母は壁に囲まれた廊下にいて、全員無事でした。

気になったのは、同じ隣組の２、３軒離れた伯母の家です。伯父は外地勤務（台北）で留守、この時間は二人の従姉妹達も動員されて学校工場などに出かけて留守。早速、伯母と高齢の義母を見に駆けつけました。驚いたことに伯母の家は柱が立っているのみで、屋根も壁も全部なくなってしまい、伯母がもんぺ姿で茫然と柱につかまって立っておりました。怪我もなくほっとしましたが、病床で寝たきりの姑には鋭い爆弾の破片が刺さり、担架で衛生病院に運ばれましたが、この夜、出血多量で亡くなりました。

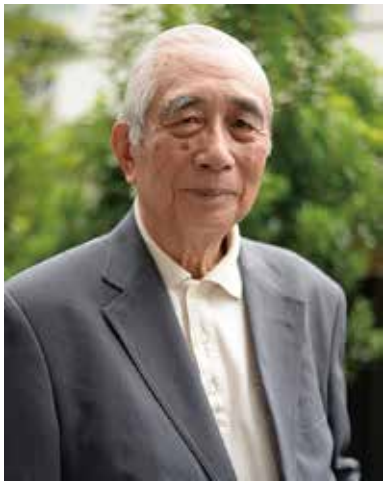
全壊の５軒の方たちはその晩からご親戚、知人宅にいらしたと思います。我が家も屋根に穴が開いた箇所とか家周りの建具、ガラスは全部壊れてなくなりましたが、雨戸が残っていてなんとか住むことができました。急に疎開することになって、父を阿佐谷の親戚宅に残して、母と私と弟の３人は、新潟県長岡市の母の故郷に疎開しました。５か月後の８月１日の夜の長岡大空襲で、焼夷弾（参照▶P20）攻撃によってすべて焼けて着の身着のままになるとは、当時は予想もしておりませんでした。

■ 友人たちとのつながり

３月４日の空襲で工場仕事を欠勤した私を心配し、その日の帰りに友人３名が家に訪ねてきてくれました。せっかくの工場配給の白菜漬物、みかんを持ってきてくださり、荻窪駅から徒歩20分もある我が家までいらしてくれたことは、一生忘れられません。

当時通っていた女学校の同窓生との交友も長年にわたって続いております。60歳の記念にと、同窓生で戦時中の手記を持ち寄って記録集を作りました。当時は、本当に家の近くで起きていることしか情報がなく、報道も限られておりました。当時の杉並区内での大事件として、覚えていることを書くことにいたしました。

桜蔭高等女学校の同窓生で作成した記録集



軍服で過ごした青春と、戦後荻窪の復興

岡　和良さん

昭和３（1928）年、井荻町下荻窪（現・荻窪二丁目）に生まれる。
父の転勤の関係で転校が多く、小学４年生の時、福岡県久留米市で日中戦争開戦を迎える。
昭和15年（1940）年３月、再び荻窪に戻り、その後中学２年生の時に太平洋戦争が始まる。
中学卒業の直前、昭和20（1945）年２月に17歳で陸軍予科士官学校（埼玉県朝霞市）に入校し、
同年８月の終戦を迎える。

■ 陸士の校庭で見た大空襲

昭和20（1945）年２月。当時17歳だった私は、実家のある荻窪を離れて埼玉県朝霞市の陸軍予科士官学校（以下、陸士）に入校し、陸軍将校を目指して厳しい訓練を重ねていた。

その年の５月25日未明、杉並区も大空襲（参照▶P18）に見舞われ、私は、その様子を実家のある荻窪から約10キロメートル離れた陸士の一隅で、ぼう然と眺めていた。紅蓮（ぐれん）の炎が何本も立ち上って、広い東京の空を一面に真っ赤に染め、火柱の合間を縫うように火の玉が上り降りしている。それは、この世のものとは思われない、脳裏に焼き付いて消えることのない巨大な「地獄絵」のパノラマだった。実家近辺が焼けているかも知れないのに、私は、茫然自失、虚脱状態で立ち尽くしていた。

夜が明けて「昨晩、東京に大空襲があって大きな被害が出たらしい。東京に実家がある者は外出を許可するから、安否を確かめてこい」との隊長の言葉に、我に返った私は一目散に荻窪を目指した。途中、空襲の被害は…と、周りを見回しながら道を急いだが、被害はほとんど見られず、また実家も被害無く、家族全員無事で安堵した。被害が壊滅的だったのは、都心に近い地域だったと、後に知らされた。

■ 死を覚悟していた青春時代

昭和19（1944）年、陸士入学の前年に
旧制中学の仲間と（後列左端が岡さん）

当時の私は、17歳でありながら常に死を覚悟していた。戦局が悪化するにつれて、陸士の訓練はアメリカ軍との本土決戦を意識した激しいものになり、敵の戦車に爆弾を抱えて体当たりするという特攻攻撃の訓練も行われた。

７月に訓練で山形県酒田市を訪れた際、私は地元の写真館に立ち寄り、陸士の制服姿で写真を撮った。戦死した時に遺影に使えるように、という思いだった。

昭和20（1945）年7月、陸士制服姿の
岡さん（当時17歳）

終戦直前、私が所属する隊は、群馬県吾妻村の新鹿沢に移転が決まった。私は、いよいよ本土決戦に向けた軍の作戦が始まったと思い、荻窪の両親に最後の別れを告げるため、外出許可を取った。８月初旬の暑い日だった。荻窪の自宅まで普通に歩けば片道約２時間だったが、外出しようとした矢先に空襲警報（参照▶P20）で足止めされ、解除された時には、帰校の門限まで２時間半しか残されておらず、炎天下を軍服姿で必死に走り続けて１時間ほどで我が家にたどり着いた。両親は死を覚悟した私の挨拶に驚いたようだったが、ゆっくり別れを惜しむこともできなかった。帰りは、伯父が自転車で送ってくれたため、何とか門限に間に合った。別れの時、潤んだ眼で私を見つめていた伯父の表情を今も忘れることができない。

■ 終戦直後の食糧、燃料事情

日本の敗戦により戦争は終結し、軍隊は解散した。７か月ぶりに帰宅して、まず驚かされたのが、食糧の著しい欠乏だった。戦争のため百姓が徴兵され、農作業は老人や女性に委ねられていたからである。

米にはトウモロコシなどの雑穀が混入し、主食の座は甘藷（かんしょ）やカボチャに奪われていた。とにかく量が足りず、捨てていた甘藷の蔓（つる）や葉まで胃袋に放り込む人もいた。

我が家では、180坪ほどある庭の芝生をはがして畑に変え、甘藷、小麦、大豆、カボチャ、ナス、キュウリなどの生産に励んだ。農家出身の父の下で、私も鍬（くわ）の使い方などを教わり、食料事情の改善に微力を尽くした。

当時、都会の人々は、農家へ出向き、衣類や貴重品などと引き換えに拝み倒して食料を分けてもらったりしていた。私も父の郷里である佐賀県の親類の農家まで米をもらいに行った。東京駅から博多駅まで24時間立ちっぱなしで列車に揺られ、降りた時にはうっ血した足の甲が紫色に腫れあがっていたのを覚えている。当時、巷では「米一升土地一坪」と言われていた。この言葉は、米がいかに貴重品であったかを、如実に物語っている。

また、燃料不足も深刻だった。我が家には、当時としては珍しく風呂があったが、店で燃料が買えないため、やむなく庭木を伐採して薪に当てた。しかし、それもすぐに底をつき、私は自転車に乗って燃料を探し回った。高円寺近辺や、宮前にある春日神社近くの製材所まで出向き、オガクズを分けてもらって風呂の燃料にする日々が、終戦後の２～３年、続いたように思う。

■ 終戦翌年に、町会が盆踊りを開催

終戦から１年ほど経つと、食料の配給状況も好転し始め、人々の生活にも少しずつゆとりが戻ってきた。昭和21（1946）年、私は慶應義塾大学に入学。やっとスポーツを楽しむ余裕もでき、近所に住んでいた友人と一緒に、まわりに呼びかけて町会の野球チームを作り、隣接町会と対抗試合を開いたりした。ユニフォームもなく作業ズボンで臨んだ試合だったが、再び運動ができるうれしさでいっぱいだった。

また、その年の夏には、早くも近所の広場に祭り櫓（やぐら）が組まれ、町会主催の盆踊りがにぎやかに開催された。曲芸師が演芸を披露する様子を見て、長い間の戦争生活から解き放たれた自由の喜びを噛みしめたことを覚えている。

参考文献:『私の昭和史』　岡 和良　著

忘れることのない空襲の記憶

戦後70年を経た今も、体験者の眼に耳に体に鮮明に焼き付いている記憶。空襲の恐ろしさ、食べるものがないひもじさ、家族や友人を亡くした悲しみ、互いに助け合って生きていた絆。戦争は街だけでなく、人々の心に深く傷跡を残し、その傷が癒えることはない。

杉並区の空襲は昭和19（1944）年11月24日にはじまり、昭和20（1945）年８月３日までの間に18回。多くの人々が亡くなり、住む家を焼かれ、甚大な被害を受けた。

「昭和20（1945）年５月25日の空襲の恐ろしさが脳裏から消えることは絶対にありません」と話すのは和田に住んでいた坂部祐さん。「あの日の夕方、空からまかれた焼夷弾は瞬く間に辺りを火の海にしました。火災により突風が巻き起こり、焼けたトタン板がビュンビュン飛び交う中を頭から水を被り、必死に逃げ場所を探しました。夜が明けて見たものは一面の焼け野原。その日から眠る場所も食べるものもない生活が始まりました」

焼け出された人だけでなく、誰もが食べるものに困り、いつも腹を空かせていたが、みな助け合って生きていた。松ノ木商店街近くの農家で育った松島四郎さんは「見知らぬ被災者に母が炊き出しをしたり、風呂を振る舞っていたのを覚えています。親族でも多くが被災し、大勢で暮らしていました」と当時の様子を語ってくれた。

一方、昭和18（1943）年10月21日には神宮外苑陸上競技場（現在の国立競技場跡地）で旧文部省主催による出陣学徒壮行会が行われ、雨の中、銃を担いだ学生たちが行進した。それまで学生には在学徴兵延期措置がとられていたが、戦局の悪化で兵力不足となり、「在学徴兵延期臨時特例」が公布された。

日本大学の予科に通っていた酒井保男さんは、広島県大竹海兵団から土浦の海軍航空隊へ入隊。その後、鹿児島県出水海軍航空隊で、基地の仕事に就き、特攻に行く多くの仲間たちを見送ったという。「お前はいいな。俺だって死にたくはない」「生きて帰れたら帰ってこいよ」忘れられない辛い思い出である。終戦までに動員された学徒は、10万人以上ともいわれている。

日本大学予科の学生たち。
撮影後、出陣学徒壮行会に向かった
（写真提供:酒井保男さん）

（資料提供:松島四郎さん）

参考文献:
『［写説］戦時下の子どもたち』
『学徒出陣五十周年記念特集号』
取材協力: 坂部祐さん、松島四郎さん、酒井保男さん
（取材:坂田）

空襲と勤労動員

中井　正幸さん

杉並区に生まれ育って、現在まで84年。私は一度もこの地を離れたことがない。
生まれた年は、1931年、いわゆる「満州事変」の起こった年。
1945年の敗戦の年は、14歳、中学（旧制）２年生だった。
おぼろげな記憶をたどって、杉並の地で体験した「空襲と勤労動員」について書く。

■ 東京の空襲――３月10日と５月25日――

1945年３月10日、杉並は全く被害を受けなかった。しかし、その夜は、もちろん杉並でも「警報」は発令されていた。僕は身支度をして、一晩中起きていた。東南の空を爆撃機（B29）が次々と横切って行った。まもなく空は真っ赤になり、煙で息苦しくなり、眼も痛くなってきた。

その１か月位後、高円寺周辺にやや小規模の空襲（参照▶P18）があった。米軍機が通り過ぎた後、東の空に打ち上げ花火が開いたかと思われた。束になった焼夷弾（参照▶P20）が空中で開いて四方に飛び散って落下するのだ。

５月25日の夜、その花火が僕の真上で開いた。空気を切り裂く鋭い音に続いてトタン板をたたくような乾いた音がした。一瞬身をすくめた。我が家を見た。わが身も、我が家も、周辺の家々も無事だった。花火が真上で開いたと見えたのが、実は我が家から１キロほど北の阿佐ケ谷駅周辺だったことを、あとで知った。

米軍機が去り、警報が解かれた後、友人と様子を見に行った。駅周辺の家々は柱や棟木が炭となってくすぶっていた。線路の枕木が煙を上げていた。荻窪方向を見たとき、一瞬、電車が火だるまになって突進してくるのではないかと思った。無人の電車が激しく燃え盛る光景は、今でも忘れられない。

■ 中学２年生の勤労動員

1945年４月、僕は中学２年生になったが、学校は兵舎として使われていて授業はなかった。僕らは、区役所の土木課のおじさんたちに引率されて、防空壕（参照▶P20）を作る毎日だった。上級生たちは、軍需工場で働いていた。下級生たちは疎開していて東京にいなかった。

防空壕は西荻窪の、ある病院の庭に作ることから始まった。それが終わると、高円寺駅南口、阿佐ケ谷駅北口へと移った。駅前はすでに家や店などが取り壊されて、何もない広場になっていた。病院は入院患者が、駅前は電車の乗客が空襲を避けるためのものだった。

防空壕を作る作業は、決められたところに決められた大きさの四角の穴を１メートルぐらいの深さまで掘り、その土を穴の周囲に積み上げる掘削班、建物疎開（参照▶P18）で取り壊された家の柱などの材木を大八車で運ぶ運搬班、柱を穴の四隅に立て、屋根を作りそれに土をかける組立班の３つに分かれていた。僕らはそれらの作業を交代でやった。

４月に始まったこの仕事は夏になっても続いた。いつ終わりになるかわからなかったし、「学校」はなかった。穴を掘り、材木を運び、柱を立て屋根を作ることが僕らの「学校」だった。

やがて広島と長崎に「新型爆弾」が落とされたことを新聞で知った。もはや僕らの作る防空壕が何の役にも立たないことは、だれの目にも明らかだった。しかし、僕らの仕事は、８月15日まで続いた。戦争の終わりは、僕らにとっては、防空壕作りの終わりだった。あくる日からは何もすることがなかった。

秋、何か月ぶりかで学校に行った時、僕は120円か130円の金を渡された。日給１円。僕が生まれて初めてもらった給料である。